



横光利一論一新感覺派から本的なものへ

劉, 妍

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2011-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5363

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005363>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

横光利一論—新感覚派から日本的なものへ

氏名：劉 妍

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名	(主)	林原純生	教授
	(副)	福長 進	教授
	(副)	奥村 弘	教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

論文内容の要旨

横光は文芸戦後講演会への参加や大東亜会議での宣言などによって、「文学における戦争責任者」として非難され、戦時下に書かれた作品を、「日本主義的」な文学と、不当に評価されてきた。しかし、それは逆に作品の中に混在するさまざまな問題や思想的要素を見え難くしている。横光の文学は総じていえば、第一次世界大戦後、西欧に興したさまざまな文芸理論、カントの認識論、近代科学のさまざまな要素を作品に取り入れ、思想上、理論上の文学変革をめざすものである。輸入した西洋文明をいかに日本化し、〈日本的なもの〉を創出するかを終始一貫して課題にしている。換言すれば、横光は近代ヨーロッパの洗礼をうけた日本の知識人を代表しており、常に近代ヨーロッパ的なものと、東洋あるいは日本的なもの(非合理的、非科学的なもの)への志向が共存している。こうした矛盾は調和されないまま、二つに引き裂かれ、その文学活動が矛盾と分裂の中で展開されていく。ここに横光文学における根本的な矛盾が隠されている。そうした志向は、彼の文学活動においていかなる形で展開され、戦時下に流通した言説とどう繋がっていくのか、作品の中で近代主義批判(合理主義・科学主義批判)がどのように展開されたのか、その経緯を検証することが本論文のテーマである。

横光の再評価が昭和五〇年代から推し進められてきたが、彼は文学活動においてなぜく日本的なものに傾倒していったのか、その経緯と戦争という特殊な時代状況との関連などは再評価されてきた今日でもまだ明確されていない点である。近年、横光と保田與重郎を昭和一〇年代前後の「文芸復興期」の言説と結びつけて比較研究を行った河田和子(『戦時下の文学と〈日本的なもの〉—横光利一と保田與重郎』花書院、平成二一年三月)の論考は一つの指標的研究といえる。戦時中の横光の文学と同時代文壇の動向を知るうえで、大変重要な示唆を与えている。本研究もまた、基本的にこうした視点と問題意識を踏襲し、共有している。なお、河田氏は「機械」(『改造』昭和五年)以後作品と科学主義との関連について論考を展開されているが、新感覚派時代の代表作である『上海』とそれ以前の作品について触れていない。しかし、筆者は横光における近代主義批判の傾向がむしろ初期の作品にすでに現れていると考える。例えば、新感覚派時代の代表作とみなされた「蠅」(『文芸春秋』第五号、大正一二年五月)、「頭ならびに腹」(『文芸時代』創刊号、大正一三年一〇月)などは、人間の意志によらず、あらゆる存在の相関関係によって左右された人間の運命が描かれている。換言すれば、これらの作品には主体である人間が客体としての世界を支配するという近代合理主義に反する認識論が表れている。特に「東洋的知的への帰還」(岩上順一『横光利一』東京ライフ社、昭三一・一〇)の端緒となっている『上海』に

は横光の近代国家観が表れている。こうしたことから、〈日本的なもの〉に回帰していく過程を検証する際には「機械」より以前の新感覚派時代の作品から検証すべきだと思われる。それゆえ、本研究は新感覚派時代の代表作『上海』（昭四〜七）を取り上げ、「機械」（昭五）、『旅愁』（昭一二〜二一）の分析を経て、最終的に敗戦後の代表作「微笑」（昭二三）まで、横光が追い求めてきた〈日本的なもの〉とはなにか、彼の辿ってきた道を探る。

本論文は前述した趣旨から、横光の戦争観・国家観を示した一連の作品・評論と当時の時代状況の関連性を重視して検討を行う。第一部は昭和三年張作霖爆殺事件にはじまる中国大陸進出から昭和六年満州事変勃発までを、第二部は日中戦争、太平洋戦争が勃発する昭和一〇年代を中心に、総力戦体制下の作品を検討する二部構成になっている。

横光の文学は東アジアの戦争、植民地の問題とも深く関わっているため、第一部では中国の文学動向をも加え、比較文学の視点から横光の『上海』と中国の新感覚派文学、プロレタリア文学『子夜』の作品分析を行った。第一章において、初めて横光の翻訳と受容状況を調査し、整理する作業を行い、従来の象徴主義・擬人法の視点から新感覚派としての文体を論じるのではなく、象形文字の漢字の〈表意〉作用を強調した横光の形式論に注目した。また、横光のめざした非日常的表現である「新しい文語体」が中国モダニズム文学の最初である中国新感覚派にどのような影響を与えたかを検証し、日本文学のより広い視野から、東アジアにおける横光文学の位置づけを考察した。

第二章は横光の『上海』を切り口に日本と中国の新感覚派文学の比較研究をし、植民地都市上海がいかに表象されたのかについて考察した。従来の研究では、表現の手法のみに焦点を当て、二者の〈影響と受容〉関係が論じられてきた。筆者はレトリックの分析を行った上で、社会的見地から上海の表象を考察した。中国新感覚派文学は上海を巨大資本が生み出した煌びやかな都市空間として描いたが、横光の上海は暗い、貧しい、汚穢なアンダーグラウンド・ワールドであった。またこのことは、上海に東洋の伝統を見出した芥川龍之介や谷崎純一郎などの作家と一線を画している点でもある。横光が描く上海の暗さは、満州事変勃発当時の上海を中国新感覚派が描く上海よりも的確に反映している。横光は上海を「東洋の掃溜」（『上海』）として捉えており、西洋の思想や、経済が上海に浸透し、〈近代化〉することに危機意識を抱いていた。国家、民族、日本を含めた東洋という問題を痛烈に意識し描いた『上海』では横光の近代国民意識が記されている。

第三章では同じ労働者罷業を題材にした中国プロレタリア文学の聖典『子夜』と比較し考察を行った。結果として、プロレタリア文学の労働者対資本家という単純な二項対立よりも、共産党に指導される労働者と欧米列強、中国資本家と日本、東洋（中国と日本）の資本主義とロシアマルキシズムや欧米

資本主義の対立という何重にも絡み合う対立の図式を用いることで、当時の上海の複雑な情勢を示すことが可能となった。

第四章は横光の反科学・反機械論の転機となった「機械」を取り上げる。「機械」は従来、一人称の語りの問題や、自意識の問題、レトリックの視点から論じられることが多いが、筆者はモダニズム文学（新感覚派文学、プロレタリア文学）の視点を取り入れ、「モダニズム」の持つ〈反近代性〉から論じた。当時流行する芸術派の（ロマンチズム）的な機械観や、階級性から捉えるプロレタリア作家小林多喜二の機械観と違い、横光の（機械）（科学）は人間を正気から狂気におとし入れるものである。また、〈機械〉は物と物、事と事、人間と人間との関係の比喩である。初期の科学への崇拝は、自然科学は何よりも人間の心理を侮辱したという機械への不信任感、否定的な認識へ転向し、「機械」以後にも継続される。晩年の大作『旅愁』、「微笑」に至るまで、狂気に陥る主人公は科学と人間性の二律背反の問題に苦悩した横光利一の観念の集約であり、近代そのものがはらむ問題ともいえる。

第五章は横光の日本的なものへ傾斜を最も示す『旅愁』を論じる。『欧州紀行』で示した横光の心理移動を分析することによって、欧州の旅行を契機にした〈日本回帰〉は、横光の内発的なものであるということが判明した。そこに書かれた民族や植民地の問題は、『旅愁』で東洋と西洋の対立として描かれる。西洋を代表する〈近代〉を超克する意欲は、昭和一八年前後に「文芸復興」、「日本精神」、「日本的なもの」の議論が高まる色濃いつ時代性が現われている。

『旅愁』で横光は観念的な日本的なものを捜し求め、西洋の合理を代表するキリスト教と古神教の対立に発展する。古神道に代表される〈日本精神〉を持ち出したのは、近代科学を日本的な思考＝〈日本的なもの〉に繋げていこうとする横光の志向が含まれている。そこに書かれている伊勢神宮、みそぎ、幣帛とはすべての対立を包容する古神道のシンボルである。幣帛は数学の集合論と似ているなどを論じたのは、古神道によって科学を超克する考えである。それは第三篇から第五篇を書く間に起きた大東亜戦争、太平洋戦争の影響によるものである。横光は合理性を追求するあまり生まれた対立から戦争が起きたと考え、古神道によって克服しようとした。『旅愁』の終末「梅瓶」では日中戦争が始まり、横光が久慈を上海に行かせ、「東洋独自の精神の結合に似た一線」を求めさせる。それは俳句精神、古神道、数学に共通している「無」でもあり、東洋精神の「空」でもある。それらによって西洋国家を超克し、アジアの〈新しい秩序〉を作ることを目指している。

第六章は戦後に書かれた遺作「微笑」を取り上げる。「微笑」は『旅愁』の問題を凝縮した、戦時中の横光文学の残照ともいえる。主人公の抱える「排中律」の問題は戦時中から戦後にかけて横光が思索し続けてきた問題である。ここで再び確認することによって、「微笑」は『旅愁』を補強し、戦後、新

しい秩序を求めて再出発する横光の決意でもあることが明瞭となった。

『上海』から「微笑」までの作品は、西洋と東洋のはざまで揺れ悩む知識人の苦悩を描き映している。横光が西欧の知性と対立するために持ち出した〈日本的なもの〉は観念的な古神道や俳句、排中律であった。それは結局戦後、寛克彦の標榜する国家神道、日本主義的なものと見なされ、批判されたが、本研究を通して、横光の古神道は寛克彦やラフカディオ・ハーン、川面凡児らが考えていた各々の神道を取り合わせながら創出された一切の対立や矛盾を調和、統一する、独自の〈古神道〉であることが判明した。

人間の頭脳を破壊する「機械」、から殺人光線の「微笑」に至るまで、科学の問題に真剣に取り込んだ横光の姿勢がうかがえる。新感覚派時代の作品「静かなる羅列」（『文芸春秋』大一四・七）はアインシュタインの相対性理論の新しい認識の方法を取り入れて書かれたものだが、「微笑」は相対性理論を否定するようになる。その道筋は、近代科学に魅了されながらも、超克・反抗しようとする横光の〈近代〉（西洋科学）に対する矛盾した態度が現れている。作品に表れる融和、統一のできない矛盾は、戦後混沌とした日本の社会状況を彷彿させるものである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	劉 妍
論 文 題 目	横光利一論 ―新感覚派から日本的なものへ
要 旨	
本論文は、横光利一の文学作品を、新感覚派時代から敗戦後の「微笑」に至るまで、同時代の証言や、横光利一の海外に於ける翻訳・受容、彼の西洋体験など多面的な視点から論じ、短い間であったが同時代に大きな影響を及ぼした彼の文学を特に昭和の文学史に位置づけようとした論文である。以下、各章に渡ってその要旨を記述する。 第一部第一章は「横光利一と近代漢字圏文脈のモダニズム文学」と題され、「モダニズム」の典型として必ずしも同時代の日本において評価の高くなかった横光利一の初期作品が、中国や台湾の文学者の関心を引き、中国語の翻訳を通して、中国に大きな影響を与えたことを、また戦後においても新たな横光利一への関心が高まった具体的な例をあげ、新感覚派のなかでも、特に横光利一の作品が、現代の文学史的な評価以上に大きな存在であったことを論証する。 第二章は「植民地の表象と女性像」として、横光利一『上海』の一篇「風呂と銀行」とそのパロディとも言える植民地下の台湾に生まれた中国新感覚派の劉呐鵬の作品「礼儀と衛生」を比較対照し、双方の小説表現における特徴と都市上海の造型を考察する。その前提として、本章は劉呐鵬の昭和二年の日記において日本の同時代の文学では横光利一に言及に頻度が最も高いこと、また劉呐鵬が横光利一のみならず片岡鉄兵等、新感覚派の作品を多く翻訳したことを指摘する。本章では、横光利一『上海』が、その都市としての夜の部分を強調し、上海を固有の地名を持たない東洋の「不思議な都会」としての物語の空間として造型されているとき、劉呐鵬の「礼儀と衛生」では、煌びやかな近代商業都市として具体的造型されていること、また、横光利一『上海』に登場するロシア人女性や参木とお杉との交流に着目して、登場人物の国家やアイデンティティの喪失と獲得の物語としての『上海』に対して、劉呐鵬の作品は、モダン都市としての上海の国際性が読み取れるとし、その対比から、後の横光利一『旅愁』への過程を展望する。 第三章『上海』における五・三〇運動の描写をめぐって』は、横光利一『上海』と茅盾『虹』『子夜』の比較を通して、『上海』における、革命運動の描写を検討する。『上海』では主な舞台が中国人街とイギリス租界であるとき、『子夜』ではそれがフランス租界であること等、両作品における租界の表現を検討することで、本章は『子夜』が中国民族資本対共産党と労働者という分かりやすい対立図式を持つことに比べ、『上海』はより重層的で多面的な対立要素を含みながら、そしてその先鋭的な表現意識にもかかわらず「自分の住む惨めな東洋」という認識の枠組みのなかで、「東洋対西洋」という問題設定に拘った横光利一の歴史的・思想的な限界を指摘する。 第四章は、発表当時、「新心理主義小説」として注目された「機械」を対象とする。本章では、まず、「機械」が発表された昭和5年前後の文学史状況を概観した後、「モダニズム」という語句が文学史の概念として定着したのが昭和25年頃であること、その「モダニズム」の文学史的な概念からは、日本の近代文学における「モダニズム」の検証と評価は不十分であることを指摘した後、関東大震災の後の「モダニズム」文学の内容を「機械」の読解を通して明らかにしようとする。本章は小林多喜二「工場細胞」と「機械」を比較しながら、「機械」における「モダニズム」には、反資本主義という点では、同時代のプロレタリア文学と共通しているが、機械が象徴する近代科学がもたらし	
主査記載 氏名・印	林原純生

た個人の意識の錯乱を東洋における「自然」の回復によって救済しえとした点に、横光利一の独自の「モダニズム」があるとする。

第二部第一章は横光利一の「旅愁」を分析する。本章第一節は、昭和11年の横光利一の欧州旅行や、その記録「欧州紀行」の意味に触れた研究論文や同時代の文学者の発言を整理した後、いわゆる横光利一の日本回帰は、その旅行の体験の直接的な結果ではないとし、あらためて『旅愁』の作品内の時間、発表過程、執筆時期、改稿過程を調査し、『旅愁』の日本回帰は、昭和16年末頃に執筆された第三篇から始まること、そしてその日本回帰の背後には、菊池寛を典型とする文芸統後運動による文学者達の活発な大政翼賛の運動があったとする。本章第二節は、さらに、横光利一の「みそぎ」や古神道への関心、『旅愁』に見られる古神道への言及を詳細に分析して、『旅愁』においても「東洋対西洋」という図式は当初の問題提起からは結果として変化しないとして、横光利一の文学営為の矛盾と限界性を指摘する。なお、本章では、『旅愁』評価をめぐる様々な発言が研究史として整理されており、特に『旅愁』における千鶴子と矢沢の恋愛、特にチロルでの描写への高い評価、さらに戦後においても横光利一の作品が高等学校の国語教科書に採用され、その半分程がチロルの場面であるという事実を紹介して、『旅愁』評価、横光利一研究の戦後の問題の重要性を的確に指摘している。本章第三節『旅愁』異同の校合―戦争・検閲・表現―は、戦後における横光利一研究の具体的な問題として、『旅愁』の改稿過程を調査する。本節では、戦前の『旅愁』の改稿、新聞掲載時から単孤本発行においての改稿による異同を例示した上で、戦後の改稿、すなわち、横光利一が山県の大隈公使館でのGHQの検閲・命令のもとでの改稿をも明らかにしている。具体的には、「植民地」「西洋」「大神」等で、本節では、戦後の改稿が字句の変更・削除のみではなく、文意そのものをも改変されたことを明らかにし、戦後という空間のなかでより一層困惑し混迷する横光利一と、彼の作品の全体像把握の問題の困難さを確認する。なお、本章での「旅愁」の改稿による異同、教科書掲載作品については、「微笑」の異同、横光利一の中国語訳リストとともに論文末に資料として付されており、本章での論旨を補強するのみならず、『旅愁』の生成過程と、政治的な権力が文学作品への圧力の実態を示すものとして労作である。

最終章は「微笑」論として、横光利一の死後発表された「微笑」を分析する。「微笑」が、『旅愁』と敗戦の問題を直接引き継いだものであること、さらに本章は「微笑」が、戦争末期に発表された評論「特攻隊」と本質的に相違は認められないことを指摘して、横光利一の文学の一貫性を明らかにするとともに、横光利一が提起した問題が、戦後文学においても、改めて繰り返し検証されるべきものとする。

以上のように、本論文は、横光利一の文学作品と、彼が生きた時代を総合的に検討して、彼の文学の持つ問題の普遍性と限界を明らかにしようとしたものである。現在において必ずしも充実しているとは言えない横光利一の文学を詳細に分析し、その変化と一貫性を明らかにした本論文は、戦後の新版の全集が刊行されて以降の横光利一の作品を丹念に読解した成果として評価される。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者劉妍が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を持つとの結論に達した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	林原純生	副 査	教授	奥村 弘
副 査	教授	福長 進	副 査	准教授	田中康二
副 査	教授	鈴木義和			